

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 26 2022*

日本語学習者における日本語文法・語彙テスト
18か月の正答率の推移
—日本の大学に留学中の中国語母語話者を対象に—

安田 真由美・中原 郷子

Changes in the Rate of Correct Answers in Japanese Grammar and
Vocabulary Tests for 18 Months among Japanese Language Learners:
For Chinese Native Speakers Studying at a Japanese University

YASUDA, Mayumi・NAKAHARA, Satoko

長崎外大論叢

第26号
(別冊)

長崎外国語大学
2022年12月

日本語学習者における日本語文法・語彙テスト 18か月の正答率の推移

—日本の大学に留学中の中国語母語話者を対象に—

安田 眞由美・中原 郷子

Changes in the Rate of Correct Answers in Japanese Grammar and
Vocabulary Tests for 18 Months among Japanese Language Learners:
For Chinese Native Speakers Studying at a Japanese University

YASUDA, Mayumi・NAKAHARA, Satoko

Abstract / Short Outline (概要)

In this study, 24 native Chinese speakers studying at the undergraduate level in a Japanese university were tested on their grammatical and lexical knowledge of Japanese (based on levels N5-N1 of the Japanese Language Proficiency Test), six times, at regular intervals, to investigate how the correct answer rate by difficulty level changed, and whether the patterns of change differed depending on the difference in Japanese proficiency upon admission. The results showed that, although differences were found depending on the proficiency level, the correct answer rate of the grammatical tests does not increase steadily depending on the length of the study abroad period, and the scores that have increased once are not maintained. It is suggested that it gradually develops while repeating mistakes. Furthermore, it became clear that different transitions were shown depending on the difficulty of the test questions. In terms of the correct answer rate of the lexical knowledge tests, regardless of the learner's proficiency level, general increase was observed in correct answer rate for N3 level vocabulary depending on the duration of study abroad. However, N1 and N2 vocabulary revealed an inconsistency in the pattern of change.

キーワード

日本語文法・語彙テスト 正答率の推移 中国語母語話者 問題難易度別 習熟度別

1. 問題と目的

独立行政法人日本学生支援機構の「2021（令和3）年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、2021年5月1日現在の留学生数は242,444人（前年比37,153人（13.3%）減）で、2019（令和元）年度312,214人をピークに減少が続いている。在籍機関別の内訳を見ると、242,444人のうち大学・短期大学等の高等教育機関（以下、大学等）に在籍する外国人留学生数は201,877人（前年比16,906人（7.7%）減）で、ここ数年は減少が続いているとは言え、依然多くの留学生が日本国内の大学等で学んでいる。また、大学等に在籍する出身国（地域）別の外国人留学生数を見ると、中国114,255人

(47.1%)、台湾4,887人(2%)で、中国語を母語とする留学生があわせて50%近くを占めている。

外国人留学生が日本の大学の学部で学ぶ場合、入学前に初級、中級レベルの日本語を学習し、N2レベル相当以上の日本語力をつけることが求められている。これについて、文部科学省は、2022年4月6日「外国人留学生の適切な受入れ及び在籍管理の徹底等について」という通知において、「外国人留学生の入学者選抜に当たっては、(中略)特に、日本語等の必要な能力の基準(日本語で授業を行う場合、日本語能力試験N2レベル相当以上が目安)を明確化し、適正な水準を維持することが重要」と明記している。

N2レベル相当の日本語力を身につけ、日本の大学に入学した留学生は、入学後も日本語学習を継続し、日本語能力試験(以下、JLPT)N2やN1合格を目指して、対策授業を履修している場合も少なくない。このような日本語学習者が日本の大学に入学する前、すでに自分の国、もしくは日本国内の日本語教育機関で学習した初級や中級レベルの文法知識や語彙知識は、日本の大学に入学後、何が、どの程度、どのような過程を経て変化するのだろうか。

これまで、日本語学習者の日本語能力の測定にJLPTが最もよく活用されてきた。学習者本人も日本語学習の進捗状況を測る一つ的手段としてJLPTを受験し、日本語教育に携わる教師や留学生を採用する企業の担当者も、JLPTの結果を日本語学習者の日本語能力の目安とすることが多い。しかし、その一方で、JLPTで測られるような「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」の中の「言語知識(文法・語彙)」がどのように変化していくのか、縦断的に調査した研究はほとんど行われておらず、いまだ明らかではない。

第二言語習得(以下、SLA)研究の分野において、Kellerman(1985)は言語学習の第1段階(ステージ1)では、学習者は目標言語の基準に一致し、エラーがなく、第2段階(ステージ2)では目標言語の基準から逸脱、第3段階(ステージ3)で再び目標言語の基準に戻ると述べている。つまり、学習者の言語発達は目標言語体系に近づくために一直線に発達するのではなく、U字型の行動の発達(U-shaped behavioral development: Kellerman, 1985)(以下、U字型発達)をすると考えられ、これまで多くのSLAの調査で観察されている。Shirai(1990)は、英語習熟度別に分けた日本人3グループと英語母語話者を対象に“PUT”が用いられている20文それぞれの受容性を7段階で判断するテストを実施した結果、いくつかの項目でU字型発達と見られる現象が観察されたと報告している。そして、U字型発達はすべての項目で見られるのではなく、限定的であること、学習者の母語と学習言語が類似している場合には非典型的な「正の転移」として観察される傾向があることを明らかにした。田丸ほか(1993)は、学習初期の頃より学習のより進んだ段階では、長い文や複雑な文を作ることができるが正確さが落ちたことを報告し、これはU字型発達に関連している可能性がある」と述べている。また、Morita(2004)は、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級Ⅰ、上級Ⅱの4つの日本語能力グループの学生を対象に、自他対応動詞の習得において動詞の種類(自動詞と他動詞)がどのように影響しているかを調査した結果、中級Ⅱのグループは中級Ⅰのグループよりも日本語能力が高いにもかかわらず、中級Ⅰのスコアが中級Ⅱより高いと報告し、中級Ⅱのスコアが低かったことについてはU字型発達を反映していると考えられると述べている。Shirai(1990)やMorita(2004)は、U字型発達が見られる要因の一つとして、instructional effect(教示効果)の影響を挙げている。例えば、学習してから時間の経過の長短や、教室等で触れる頻度、学習機会の有無の差が結果に影響を与えた可能性を指摘している。

日本の大学の学部で留学中の日本語学習者を対象に、一定期間ごとに日本語文法と語彙の知識を問う JLPT の N5～N1 に準拠したテスト（以下、文法・語彙テスト）を継続的に実施し、正答率の変化を観察した研究を 2 つ紹介する。安田・中原（2020）は、入学時期ごとに日本語学習者を 2 つのグループに分け、1 年間の総正答率を調査した結果、日本語習熟度の異なる群の間で多少の差は見られるものの、総正答率が上がった時期はどちらのグループも入学後 2 学期目の終わりであったと報告し、目標言語環境に身を置いている場合は、1 年程度で知識が再構築される可能性があるとして述べている。また、中原・安田（2022）は、母語別に日本語学習者を 2 つのグループに分け、文法・語彙テストの正答率のうち、文法テストの総正答率の推移を観察した結果、中国語母語話者には U 字型の結果が見られたものの、韓国語母語話者には見られなかったと報告し、学習者の母語の違いにより U 字型発達の現れ方が異なる可能性を示唆している。さらに、問題の難易度によっても U 字型の現れ方が異なっていたと述べている。

以上をふまえ、本研究では、母国で 1～3 年日本語を学んだ後、日本の大学の学部で留学中の中国語を母語とする日本語学習者を対象に、一定期間ごとに文法・語彙テストを 6 回行い、それぞれの問題難易度別正答率がどのように変化するか、また、入学時の日本語力の違いにより、変化のパターンが異なるかを縦断的に調査した。

2. 方法

2.1 調査参加者

20××年春学期と秋学期に A 大学に 1 年次入学または 3 年次編転入学（以下、入学）した中国語を母語とする日本語学習者 24 名であった。入学年次別内訳は、1 年次 3 名、3 年次 21 名、男女別内訳は、男性 7 名、女性 17 名であった。いずれの調査参加者も、入学前に自分の国で 1～3 年、日本語を勉強している。JLPT の N5～N1 に準拠した入学時のプレイスメントテストでは、76 点満点中、20～29 点が 2 名、30～39 点が 2 名、40～49 点が 13 名、50～59 点が 5 名、60～69 点が 2 名であった。入学後、調査参加者はプレイスメントテストの結果により振り分けられた四技能別の日本語の授業や JLPT の N1、N2 合格を目指した授業、その他、教養科目や専門科目を履修していた。

また、調査開始前に、調査目的と方法、個人データの取り扱いについて説明され、この調査への参加は任意であること、不参加でも不利益を被ることがないこと、不都合が生じた場合はいつでも参加を取り消すことができること、これを理解し同意する場合のみ、調査参加同意書の書面に署名するよう伝えられた。

2.2 材料と実施時期

調査では、同じ問題構成の 6 つのテスト（以下、T1～T6）を使用した。テストは、JLPT の N5～N1 レベルの文法問題と N3～N1 レベルの語彙問題で構成されており、N5、N4 レベルの文法問題については、『みんなの日本語 初級Ⅰ本冊』、『みんなの日本語 初級Ⅱ本冊』から抜粋して作成し^{注1}、N3～N1 レベルの文法問題については『日本語パワードリル』N3～N1（松浦，2011）、『日本語総まとめ』N3～N1（佐々木・松本，2010）から抜粋して作成した。語彙問題については、文脈規定と用法について出題し、それぞれ『日本語パワードリル 文字・語彙』N3～N1（松浦・鈴木，2010，2011）から抜粋し、作成した。T1～T6 の合計問題数と文法と語彙の問題数は次の通りである。途

中、問題数の見直しを行ったため、テストの実施時期によって問題数が異なっている。T1と T2は合計76問（文法54問、語彙22問）で実施、T3と T4は合計76問（文法54問、語彙22問）で実施した時と合計100問（文法63問、語彙37問）で実施した時がある。T5～T6は合計100問（文法63問、語彙37問）で実施した。文法問題のレベル別内訳は、文法問題が54問の場合、N5レベル10問、N4～N1レベル各11問、63問の場合、N5レベル10問、N4レベル11問、N3～N1レベル各14問である。語彙問題の問題種別内訳は、22問の場合、文脈規定 N3～N1レベルが各 4 問、用法 N2～N1レベルが各 5 問、37問の場合、文脈規定 N3～N1レベルが各 7 問、用法 N2～N1レベルが各 8 問であった。

T1～T6の実施時期は、T1が入学直後、T2が入学 3 か月後、T3が入学 6～7 か月後、T4が 9～10 か月後、T5が12～13か月後、T6が17～18か月後であった。また、テスト受験後、日本語の使用状況や頻度に関するアンケート調査を実施し、テスト結果の分析の参考とした。

2.3 手続き

解答はすべてマークシートに記入するよう指示された。解答時間は、合計76問のテストは45分、合計100問のテストは60分であった。

T1の点数により、調査参加者を 3つの習熟度グループ、グループ A（4名）、グループ B（13名）、グループ C（7名）に分けて考察することにした。それぞれのグループの日本語レベルは、グループ A が初中級～中級前半、グループ B が上級前半、グループ C が上級後半～超級である。

3. 結果

グループ A, B, C の T1から T6の平均正答率と標準偏差を資料に示す。

T1から T6までの得点について、各習熟度グループ内でテスト時期による正答率の差があるか否かを検討するため、テスト時期を参加者内要因とする 1 要因分散分析を行った。分析に用いた数値は、テストによる問題数の違いを考慮し、正答率を角変換した値で、分散分析は IBM SPSS Statistics Ver. 27, ANOVA on the web を用いて行った。なお、本研究における有意水準は 5 % に設定した。以下、問題種類・習熟度グループごとに、各問題難易度の主効果、多重比較結果を示す。多重比較は全て Ryan 法で行った。

3.1 文法

3.1.1 A グループ

N5, N4の主効果が有意で、N1の主効果には傾向差がみられ、N3, N2の主効果は有意ではなかった (N5 : $F(5, 15)=5.83, p=.004, \eta_p^2=.66$, N4 : $F(5, 15)=3.41, p=.030, \eta_p^2=.53$, N3 : $F(5, 15)=0.44, p=.813, \eta_p^2=.13$, N2 : $F(5, 15)=1.95, p=.146, \eta_p^2=.39$, N1 : $F(5, 15)=2.35, p=.092, \eta_p^2=.44$)。多重比較の結果、N5において、T1が T3 ($t(15)=3.72, p=.002, r=.69$) より、T4が T3 ($t(15)=4.41, p=.001, r=.75$) より、T5が T3 ($t(15)=4.51, p=.000, r=.76$) より正答率が高いことが明らかになった。

3.1.2 B グループ

N5, N4, N3, N1の主効果が有意で、N2の主効果には傾向差が見られた (N5 : $F(5, 60)=6.78, p=.000, \eta_p^2=.36$, N4 : $F(5, 60)=9.30, p=.000, \eta_p^2=.44$, N3 : $F(5, 60)=4.64, p=.001, \eta_p^2=.28$, N2 :

$F(5,60)=2.34, p=.052, \eta_p^2=.16$, $N1 : F(5,60)=7.50, p=.000, \eta_p^2=.39$)。多重比較の結果, N5において, T1がT3 ($t(60)=2.88, p=.006, r=.35$), T6 ($t(60)=2.76, p=.008, r=.34$) より, T2がT3 ($t(60)=3.70, p=.000, r=.43$), T6 ($t(60)=3.58, p=.001, r=.42$) より, T4がT3 ($t(60)=3.18, p=.002, r=.38$), T6 ($t(60)=3.06, p=.003, r=.37$) より, T5がT3 ($t(60)=4.27, p=.000, r=.48$), T6 ($t(60)=4.15, p=.000, r=.47$) より正答率が高く, N4において, T2がT3 ($t(60)=3.30, p=.002, r=.39$) より, T4がT1 ($t(60)=2.93, p=.005, r=.36$), T3 ($t(60)=5.39, p=.000, r=.57$), T5 ($t(60)=3.66, p=.001, r=.43$) より, T6がT1 ($t(60)=3.11, p=.003, r=.37$), T3 ($t(60)=5.56, p=.000, r=.58$), T5 ($t(60)=3.83, p=.000, r=.44$) より正答率が高く, N3において, T2がT4 ($t(60)=4.05, p=.000, r=.46$), T6 ($t(60)=3.29, p=.002, r=.39$) より, T3がT4 ($t(60)=3.05, p=.003, r=.37$) より正答率が高く, N1において, T4がT1 ($t(60)=4.31, p=.000, r=.49$), T2 ($t(60)=3.56, p=.001, r=.42$), T3 ($t(60)=4.37, p=.000, r=.49$) より, T6がT1 ($t(60)=3.94, p=.000, r=.45$), T2 ($t(60)=3.19, p=.002, r=.38$), T3 ($t(60)=4.00, p=.000, r=.46$) より正答率が高いことが明らかになった。

3.1.3 Cグループ

N5, N4, N3, N2, N1の主効果が有意であった (N5 : $F(5,30)=4.27, p=.005, \eta_p^2=.42$, N4 : $F(5,30)=6.70, p=.000, \eta_p^2=.53$, N3 : $F(5,30)=9.18, p=.000, \eta_p^2=.61$, N2 : $F(5,30)=3.53, p=.013, \eta_p^2=.37$, N1 : $F(5,30)=4.82, p=.002, \eta_p^2=.45$)。多重比較の結果, N5において, T1がT3 ($t(30)=3.27, p=.003, r=.51$) より, T2がT3 ($t(30)=3.34, p=.002, r=.52$) より, T5がT3 ($t(30)=3.74, p=.001, r=.56$) より正答率が高く, N4において, T4がT2 ($t(30)=3.76, p=.001, r=.57$), T3 ($t(30)=4.17, p=.000, r=.61$) より, T6がT2 ($t(30)=3.86, p=.001, r=.58$), T3 ($t(30)=4.28, p=.000, r=.62$) より正答率が高く, N3において, T1がT4 ($t(30)=3.55, p=.001, r=.54$), T6 ($t(30)=3.07, p=.005, r=.49$) より, T2がT3 ($t(30)=3.84, p=.001, r=.57$), T4 ($t(30)=5.82, p=.000, r=.73$), T5 ($t(30)=4.09, p=.000, r=.60$), T6 ($t(30)=5.34, p=.000, r=.70$) より正答率が高く, N2において, T4がT1 ($t(30)=3.18, p=.003, r=.50$), T6 ($t(30)=3.67, p=.001, r=.56$) より正答率が高く, N1において, T6がT1 ($t(30)=4.32, p=.000, r=.62$), T3 ($t(30)=3.35, p=.002, r=.52$), T5 ($t(30)=3.18, p=.003, r=.50$) より正答率が高いことが明らかになった。

3.2 語彙 (文脈規定)

3.2.1 Aグループ

N3, N2の主効果が有意で, N1の主効果は有意ではなかった (N3 : $F(5,15)=5.35, p=.005, \eta_p^2=.64$, N2 : $F(5,15)=3.25, p=.035, \eta_p^2=.52$, N1 : $F(5,15)=0.97, p=.468, \eta_p^2=.24$)。多重比較の結果, N3において T6がT1 ($t(15)=4.35, p=.001, r=.75$), T3 ($t(15)=3.23, p=.006, r=.64$), T4 ($t(15)=3.92, p=.001, r=.71$), T5 ($t(15)=3.75, p=.002, r=.70$) より正答率が高いこと, N2において T1がT4より正答率が高いことが明らかになった ($t(15)=3.65, p=.002, r=.69$)。

3.2.2 Bグループ

N3, N2, N1の主効果が有意であった (N3 : $F(5,60)=6.75, p=.000, \eta_p^2=.36$, N2 : $F(5,60)=8.06, p=.000, \eta_p^2=.40$, N1 : $F(5,60)=4.62, p=.001, \eta_p^2=.28$)。多重比較の結果, N3において, T6がT1 ($t(60)=4.32, p=.000, r=.49$), T2 ($t(60)=4.81, p=.000, r=.53$), T3 ($t(60)=4.20, p=.000, r=.48$), T5

($t(60)=4.12, p=.000, r=.47$) より正答率が高く、N2において、T2がT1 ($t(60)=5.62, p=.000, r=.59$)、T3 ($t(60)=4.02, p=.000, r=.246$)、T4 ($t(60)=3.64, p=.001, r=.43$)、T5 ($t(60)=5.30, p=.000, r=.57$)、T6 ($t(60)=3.34, p=.001, r=.40$) より正答率が高く、N1において、T3がT2 ($t(60)=3.54, p=.001, r=.42$) より、T4がT2 ($t(60)=3.97, p=.000, r=.46$) より、T5がT2 ($t(60)=2.81, p=.007, r=.34$) より、T6がT2 ($t(60)=3.03, p=.004, r=.36$) より正答率が高いことが明らかになった。

3.2.3 Cグループ

N3, N2の主効果が有意で、N1の主効果は有意ではなかった (N3 : $F(5,30)=8.71, p=.000, \eta_p^2=.59$, N2 : $F(5,30)=2.66, p=.042, \eta_p^2=.31$, N1 : $F(5,30)=1.43, p=.241, \eta_p^2=.70$)。多重比較の結果、N3において、T1がT2 ($t(30)=4.18, p=.000, r=.61$) より、T3がT2 ($t(30)=4.15, p=.000, r=.60$) より、T4がT2 ($t(30)=4.44, p=.000, r=.63$) より、T6がT2 ($t(30)=6.00, p=.000, r=.74$)、T5 ($t(30)=3.74, p=.001, r=.56$) より正答率が高いことが明らかになった。

3.3 語彙 (用法)

3.3.1 Aグループ

N1の主効果が有意で、N2の主効果が有意傾向であった (N2 : $F(5,15)=2.33, p=.094, \eta_p^2=.44$, N1 : $F(5,15)=3.17, p=.038, \eta_p^2=.51$)。多重比較の結果、N1においてT6がT2より正答率が高いことが明らかになった ($t(15)=3.53, p=.003, r=.67$)。

3.3.2 Bグループ

N2の主効果が有意で、N1の主効果は有意ではなかった (N2 : $F(5,60)=5.25, p=.001, \eta_p^2=.30$, N1 : $F(5,60)=0.60, p=.703, \eta_p^2=.05$)。多重比較の結果、N2において、T1がT5 ($t(60)=4.37, p=.000, r=.49$) より、T6がT5 ($t(60)=3.91, p=.000, r=.45$) より正答率が高いことが明らかになった。

3.3.3 Cグループ

N2とN1の主効果が有意であった (N2 : $F(5,30)=8.22, p=.000, \eta_p^2=.58$, N1 : $F(5,30)=4.18, p=.005, \eta_p^2=.41$)。多重比較の結果、N2において、T1がT2 ($t(30)=2.77, p=.010, r=.45$)、T3 ($t(30)=3.27, p=.003, r=.51$)、T4 ($t(30)=3.72, p=.001, r=.65$)、T5 ($t(30)=3.72, p=.001, r=.56$) より、T6がT2 ($t(30)=3.68, p=.001, r=.56$)、T3 ($t(30)=4.19, p=.000, r=.61$)、T4 ($t(30)=4.63, p=.000, r=.65$)、T5 ($t(30)=4.63, p=.000, r=.65$) より正答率が高く、N1において、T1がT5 ($t(30)=3.85, p=.001, r=.58$) より、T2がT5 ($t(30)=2.54, p=.016, r=.42$) より、T3がT5 ($t(30)=3.66, p=.001, r=.56$) より、T4がT5 ($t(30)=3.07, p=.004, r=.49$) より、T6がT5 ($t(30)=3.59, p=.001, r=.56$) より正答率が高いことが明らかになった。

4. 考察

4.1 文法

Aグループでは、N5においてのみテスト時期による正答率の違いが見られた。法務省が2022年4月に公表した「日本語能力に関し『日本語教育の参照枠』のA2相当以上のレベルであることを証明

するための試験のリスト」によると、本研究で用いた JLPT では N4以上が A2相当以上のレベルとされている。すなわち N5は A1程度の難易度と推定することができる。調査参加者の中で最も習熟度が低かった A グループでは、A2以上の N4以上の文法問題ではテスト時期による正答率に差がなかった。N4以上の平均正答率の推移を見てみると（論文末の【資料】参照のこと）、正答率が最も高くなったテストは、N4では T4、T6、N3では T1、N2では T2、N1では T4と問題難易度によって異なっている。また、N5の正答率の推移では、T1、T4、T5の正答率が T3より高いことが示されているが、これらの結果から、比較的難易度が低い N5、N4レベルの文法知識であっても、留学期間の長さとは比例して定着していくのではないことが示唆されている。つまり、文法項目の難易度は、正確な文法知識の定着にとって決定的な要因ではなく、難易度が低いものであっても、定期的に意識して復習をしない限り、この習熟度グループの学習者においては、正確な知識の定着にはなかなかつながらないことが示唆される。

B グループでは、N5、N4、N3、N1においてテスト時期による正答率の違いが見られたが、そのパターンは問題難易度によって異なっていた。N2においてのみ主効果に傾向差が見られたが、多重比較では有意差はどこにも認められなかったことから、テスト時期によって飛び抜けて正答率が高くなることも、低くなることもなく、他の難易度の文法項目に比べてテスト時点での正確な知識の量がそれほど変動していないと言える。その要因の一つとして考えられるのは、大学での授業などで触れる日本語に N2レベル程度のものが多いことである。継続的に触れ続けていることにより、大きく下がることもないが、自分の知識とするにはまだ多少難易度が高いため、大きく上がることもないことが推察される。B グループで留学期間が最も長くなった時期である T6において最も高い正答率を示したのは N4レベルであった。A グループでも T6で最も高い正答率ではあったが、平均正答率の違い（A グループ0.68、B グループ0.90）から定着度は留学開始時点の習熟度に応じた結果となっており、習熟度の違いは、日常的に用いられることが多い N4文法であっても留学開始後1年半程度を経て、影響を及ぼしていることが示唆された。

C グループでは、全ての問題難易度においてテスト時期による正答率の違いが見られたが、パターンは一定ではなく、最も高い正答率を示したテスト時期は問題難易度により異なっていた。また、A、B グループとの相違点として C グループでは、N5、N4、N3で T1から T6まで6回のテストの平均正答率が8割を超えており、天井効果が見られた。さらに N1では T6が最も高くなっており、有意差が見られなかった T2、T4と比較しても平均正答率の値は大きくなっている。その要因としては、習熟度の高さによる言語情報処理の量と質の違いなどが挙げられる。すなわち、A、B グループでも同様に N1の対策授業を受けたり、試験対策をしたりと、N1文法知識の正確さを高める目的での学習に取り組んでいるものの、その知識を自分のものとして定着させ、問題に正解するために利用できるか否かには、習熟度の高さが影響を及ぼすと考えられる。

4. 2 語彙（文脈規定）

A グループでは、N3、N2においてテスト時期による正答率の違いが見られた。すなわち、N3では T6が T1、T3、T4、T5より正答率が高くなり、値を見ても、T6の平均正答率は7割を超えていた。N3に関しては、B、C グループも T6の値が最も高かったことから、本研究の調査参加者数の少なさから、結果を一般化することは困難ではあるが、本研究の範囲において言えば、留学開始から1年半

程度経つと、N3レベルの語に関しては、形態や意味が類似した語彙の中から文脈に合った適切な語を選択することはある程度の正確さをもってできるようになると言えよう。

B グループでは、全ての問題難易度においてテスト時期による正答率の違いが見られたが、パターンは一定ではなかった。具体的には、N3においては T6が最も正答率が高く、T1, T2, T3, T5との間で差が見られたが、N2では T2が最も正答率が高く、他の5つのテストの正答率との間で差が見られた。N1では T4が最も正答率が高かったが、T4と T3, T5, T6との間には差が見られなかった。N1に関しては、T3以降と T1, T2で値が大きく異なっていることから、留学から1年近く経つと、それまでに比べてN1のような抽象的な語彙であっても少しずつ正しく意味と類似語彙との違いが理解できるようになり、正しい使い分けができるようになる可能性が示唆された。

C グループでは、N3においてのみテスト時期による正答率の違いが見られた。すなわち、N2, N1においては値の違いはあるが、統計的に有意な差があるとは言えないという結果であった。N3では T6が最も高く、正答率の値も9割を超えている。しかし、直前の T5では正答率約69%と、T4の約82%から大きく下がっている。さらに T2の正答率は約50%であった。正答率がテスト時期によって低かった要因については、様々な可能性が考えられるが、C グループの日本語習熟度に対してN3レベルの問題で50%の正答率というのは、B グループの最も低かったN3の正答率が48%であったことから考えると、低すぎると言わざるを得ない。これは同じ T2の N3正答率が A グループで58%となっていたことから言える。これらのことから、習熟度が高いからといって、難易度がそれほど高くない項目をいつでも安定して正解できるとは限らないこと、また逆に、習熟度がそれほど高くないグループだからといって、必ずしも習熟度が高いグループより正答率が低くなるとは言えないことを示している。この現象には、習熟度と問題難易度だけに関わるのではなく、Shirai (1990) や Morita (2004) で指摘されているように、その知識に触れた頻度や触れてからの時間的な近さが影響を及ぼすと考えられる。つまり、C グループにとって、難易度がそれほど高くない N3の語彙の知識は、意識して復習をしたり、知識を整理したりする機会はありませんが、A グループにおいては、N3レベルの語彙は、まだ無意識に使える状態にはなっていないため、注意を向ける頻度が高く、日本語の授業などでも触れる機会が多いことが推察される。これらを踏まえると、習熟度が高い学習者であっても、定期的な復習の機会を設けることが既習項目の正確な知識の維持のためには有効であり、必要であると言えよう。

4.3 語彙（用法）

A グループでは、N1においてのみテスト時期による正答率の違いが見られた。すなわち、T6が T2より正答率が高かった。正答率の値を見ると N1の T2は約7%となっており、非常に正答率が低かった。他のテストではいずれも20%以上となっていることから、T2の問題に使われた項目が調査参加者にとって難易度が高かったことが考えられる。つまり、同じ N1と言っても、項目ごとの難易度は異なっており、その組み合わせによっては調査参加者の日本語力を正しく測定することを困難にさせる可能性が示唆されている。この点は今後、同様のテスト問題を作成する際に考慮すべき点として留意する必要があるだろう。

B グループでは、N2においてのみテスト時期による正答率の違いが見られた。具体的には T1, T6が T5より正答率が高くなった。正答率の値を見ると、完全な U 字型とは言えないまでも、U 字に近

い推移をしていることから、T2からT5では知識の再構築が行われていたと考えることができる。他方、N1では値としてはT6が最も高くなっているが、テスト時期による有意差は見られず、推移のパターンにもN2ほどの大きな幅はなかった。このことから、N1の知識は、新しいものとして取り込んでいる段階であり、再構築が必要になるほどに多様な知識に触れていないことが推測される。

Cグループでは、N2、N1両方においてテスト時期による正答率の違いが見られた。N2では推移のパターンがU字型を示し、N1ではU字型の推移ではなかったものの、T6で直前のT5から大きく上昇していた。N1の推移のパターンを見てみると、T1からT3にかけてと、T3からT6にかけて、2回U字型の変化をしているとみなすことができる。正答率が低下したT2とT5での直前のテストからの低下の程度は、T5において、より大きくなっており、正答率の値を見ると、T5では0.25と、T2の0.50の2分の1になっている。このことから、言語知識の習得におけるU字型の発達は1度だけ起こるのではなく、何度も繰り返され、だんだん知識が定着していくことが確認された。さらにこれは、正答率が下がる直前のT1、T3の正答率の値がそれぞれ0.63、0.61と非常に近い数値であること、最後のT6でも0.61となっていることから、大きく正答率が下がったとしても、一度身につけた知識は消えてしまっているのではなく、時間はかかったとしても、再構築が終われば、再度利用可能になることを示していると言えよう。

5. 終わりに

本研究では、日本の大学の学部留学した中国語を母語とする日本語学習者の文法・語彙テストの正答率の留学期間による推移を分析した。調査対象者の少なさから、結果を一般化することは困難であるが、特に文法の知識は留学期間によって右肩上がりに伸びていくのでも、一度伸びた点数がそのまま維持されるのでもなく、誤りを繰り返しながらゆるやかに発達していくことが示唆された。そして、問題難易度によって異なる推移を見せることが明らかになった。石田(1991)は、学習言語以外の環境で、初級、中級学習者が1年間日本語を学習しても、必ずしも誤用が少なくなると指摘しているが、本研究のデータから、中級以上の学習者が学習言語環境に身を置いた場合であっても、1年半経過しても誤用が少なくなるとは限らないということが分かる。いつの時点でどの難易度の文法知識を正確に理解し、運用できるようになるのかには、個人差が大きいと考えられるが、留学開始時点の習熟度によって、難易度に対するレディネスがいつ整うのか、ということには違いがあることが示唆された。このことを踏まえると、復習の対象や時期、頻度などを検討する際には、留学開始時の習熟度を考慮することが有効であると言えよう。

今後の課題としては、テスト問題の内容や配分、テスト時期などを再検討することが挙げられる。文法や語彙の知識が実際の運用にどの程度結びつくかは明らかではないが、知識がなければ、決して運用には結びつかない。よって、留学開始からの期間や学習者の習熟度が、文法項目や語彙の習得とどのように関わるかについて、データを蓄積し、分析することは効果的な日本語教育の実施において必要であると考えられる。

注

- 1 N5、N4レベルの問題について、日本語能力試験の問題集から抜粋して問題を作成するには問題数不足であったため、旧日本語能力試験の文法問題の出題基準を確認した上で、『みんなの日本

語 初級Ⅰ本冊』『みんなの日本語 初級Ⅱ本冊』から抜粋して、独自に作成した。

【日本語文法・語彙テスト参考教材】

佐々木仁子・松本紀子 (2010) 『日本語総まとめ N1文法』 アスク

佐々木仁子・松本紀子 (2010) 『日本語総まとめ N2文法』 アスク

佐々木仁子・松本紀子 (2010) 『日本語総まとめ N3文法』 アスク

スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版』 スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版』 スリーエーネットワーク

松浦真理子 (監修)・アスク出版編集部 (編集) (2011) 『日本語パワードリル N1文法』 アスク

松浦真理子 (監修)・アスク出版編集部 (編集) (2011) 『日本語パワードリル N2文法』 アスク

松浦真理子 (監修)・アスク出版編集部 (編集) (2011) 『日本語パワードリル N3文法』 アスク

松浦真理子・鈴木健司 (監修)・アスク出版編集部 (編集) (2010) 『日本語パワードリル N1文字・語彙』 アスク

松浦真理子・鈴木健司 (監修)・アスク出版編集部 (編集) (2010) 『日本語パワードリル N2文字・語彙』 アスク

松浦真理子・鈴木健司 (監修)・アスク出版編集部 (編集) (2011) 『日本語パワードリル N2文字・語彙』 アスク

【参考文献】

石田敏子 (1991) 「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75号, 64-77.

国際交流基金・日本国際教育支援協会：日本語能力試験 JLPT, 4つの特徴, <https://www.jlpt.jp/about/points.html> (2022年9月7日閲覧)

田丸淑子・吉岡薫・木村静子 (1993) 「学習者の発話に見られる文構造の長期的観察」『日本語教育』81号, 43-54.

独立行政法人日本学生支援機構 (2022) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」
https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2022/03/date2021z.pdf (2022年9月6日閲覧)

中原郷子・安田眞由美 (2022) 「日本留学中の日本語学習者の文法テスト正答率はどうに推移するか—大学の学部留学生における一考察—」『新長崎学研究センター紀要』創刊号, 65-76.

法務省出入国在留管理庁 (2022) 「日本語能力に関し『日本語教育の参照枠』のA2相当以上のレベルであることを証明するための試験のリスト」
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001370592.pdf> (2022年9月11日閲覧)

文部科学省 (2022) 「外国人留学生の適切な受入れ及び在籍管理の徹底等について (通知)」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1325305.htm (2022年9月7日閲覧)

安田眞由美・中原郷子 (2020) 「日本語学習者における日本語文法・語彙テストの得点に関する縦断的研究—日本の大学に留学している留学生のケースを通して—」『長崎外大論叢』第24号, 57-67.

Kellerman, E. (1985) If at first you do succeed . . . In S. Gass and C. Madden (eds.), *Input in second language acquisition*. Rowley, Mass.: Newbury House, 345-353.

- Morita, M. (2004) "The Acquisition of Japanese Intransitive and Transitive Paired Verbs by English-Speaking Learners: Case Study at the Australian National University" 『世界の日本語教育』 14号, 167-192.
- Shirai, Y. (1990) U-shaped behavior in L2 acquisition. In H. Burmeister & P. L. Rounds (Eds.), *Variability in second language acquisition: Proceedings of the Tenth Meeting of the Second Language Research Forum*, Vol.2, Eugene, OR: Department of Linguistics, University of Oregon, 685-700.

【資料】

表1 文法の平均正答率 (M) と標準偏差 (SD)

グループ			T1	T2	T3	T4	T5	T6
N5	A	M	0.73	0.67	0.40	0.80	0.75	0.60
		SD	0.16	0.12	0.16	0.07	0.23	0.07
	B	M	0.86	0.88	0.74	0.86	0.88	0.75
		SD	0.08	0.09	0.11	0.11	0.13	0.12
	C	M	0.96	0.95	0.80	0.91	0.97	0.84
		SD	0.05	0.08	0.05	0.06	0.05	0.12
N4	A	M	0.53	0.45	0.39	0.68	0.55	0.68
		SD	0.12	0.13	0.24	0.26	0.06	0.16
	B	M	0.77	0.77	0.62	0.87	0.73	0.90
		SD	0.13	0.19	0.16	0.14	0.13	0.07
	C	M	0.92	0.76	0.77	0.96	0.88	0.95
		SD	0.06	0.194	0.10	0.04	0.06	0.10
N3	A	M	0.49	0.42	0.41	0.37	0.41	0.41
		SD	0.07	0.17	0.10	0.24	0.14	0.03
	B	M	0.70	0.72	0.70	0.55	0.67	0.59
		SD	0.11	0.18	0.14	0.16	0.17	0.10
	C	M	0.86	0.95	0.81	0.71	0.82	0.74
		SD	0.15	0.07	0.13	0.09	0.09	0.07
N2	A	M	0.38	0.48	0.31	0.45	0.46	0.32
		SD	0.10	0.21	0.14	0.15	0.12	0.11
	B	M	0.55	0.58	0.50	0.63	0.61	0.49
		SD	0.10	0.15	0.11	0.13	0.16	0.15
	C	M	0.62	0.73	0.64	0.81	0.68	0.59
		SD	0.16	0.14	0.14	0.12	0.08	0.11
N1	A	M	0.22	0.24	0.27	0.46	0.29	0.41
		SD	0.15	0.11	0.14	0.10	0.13	0.11
	B	M	0.33	0.37	0.33	0.59	0.46	0.55
		SD	0.14	0.13	0.13	0.17	0.16	0.18
	C	M	0.45	0.65	0.52	0.66	0.54	0.77
		SD	0.20	0.16	0.16	0.16	0.21	0.19

表2 語彙（文脈規定）の平均正答率（*M*）と標準偏差（*SD*）

グループ			T1	T2	T3	T4	T5	T6
N3	A	<i>M</i>	0.33	0.58	0.45	0.38	0.39	0.71
		<i>SD</i>	0.12	0.12	0.11	0.09	0.12	0.20
	B	<i>M</i>	0.57	0.48	0.57	0.72	0.58	0.87
		<i>SD</i>	0.15	0.29	0.26	0.18	0.18	0.12
	C	<i>M</i>	0.79	0.50	0.80	0.82	0.69	0.92
		<i>SD</i>	0.17	0.14	0.17	0.14	0.16	0.07
N2	A	<i>M</i>	0.33	0.50	0.38	0.62	0.46	0.46
		<i>SD</i>	0.12	0.00	0.09	0.13	0.12	0.06
	B	<i>M</i>	0.50	0.82	0.64	0.66	0.55	0.67
		<i>SD</i>	0.18	0.19	0.16	0.12	0.10	0.13
	C	<i>M</i>	0.63	0.67	0.76	0.82	0.57	0.84
		<i>SD</i>	0.19	0.19	0.24	0.12	0.24	0.19
N1	A	<i>M</i>	0.33	0.25	0.48	0.34	0.39	0.36
		<i>SD</i>	0.12	0.20	0.12	0.14	0.21	0.16
	B	<i>M</i>	0.36	0.32	0.54	0.56	0.49	0.51
		<i>SD</i>	0.16	0.22	0.13	0.25	0.21	0.14
	C	<i>M</i>	0.54	0.50	0.72	0.63	0.51	0.53
		<i>SD</i>	0.17	0.20	0.17	0.29	0.20	0.18

表3 語彙（用法）の平均正答率（*M*）と標準偏差（*SD*）

グループ			T1	T2	T3	T4	T5	T6
N2	A	<i>M</i>	0.27	0.33	0.38	0.49	0.25	0.50
		<i>SD</i>	0.25	0.09	0.09	0.08	0.09	0.23
	B	<i>M</i>	0.67	0.44	0.50	0.43	0.35	0.67
		<i>SD</i>	0.21	0.24	0.22	0.19	0.19	0.18
	C	<i>M</i>	0.83	0.63	0.62	0.58	0.57	0.93
		<i>SD</i>	0.18	0.24	0.13	0.14	0.20	0.06
N1	A	<i>M</i>	0.27	0.07	0.35	0.22	0.25	0.41
		<i>SD</i>	0.09	0.09	0.06	0.24	0.09	0.20
	B	<i>M</i>	0.38	0.40	0.45	0.41	0.32	0.49
		<i>SD</i>	0.16	0.26	0.25	0.20	0.14	0.22
	C	<i>M</i>	0.63	0.50	0.61	0.55	0.25	0.61
		<i>SD</i>	0.137	0.342	0.15	0.20	0.12	0.16